



筑紫女学園大学リポジット

On the Process of Cognition in Śvetām̐ bara
Jaina Literature:sam̐ śaya and ihā

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/87

ジャイナ教における認識プロセス ～意欲 (*ihā*) の構造～

宇野 智行

On the Process of Cognition in Śvetāmbara Jaina Literature: *saṃśaya* and *ihā*

Tomoyuki UNO

0. 序

ジャイナ教が提示する認識プロセスとして、感受 (*avagraha*)・意欲 (*ihā*)・判断 (*avāya* / *apāya*)・保持 (*dhāraṇā*) という四つの過程が、白衣派聖典、独立論書を問わず認められていることは夙に知られている。感覚器官・マナスを通じた認識型である感覚知 (*matijñāna* / *ābhiniḥbodhikajñāna*) は、これら四つの過程を有していると考えられ、これらの過程を以て我々の日常的な認識活動が説明されている。感覚知の外界対象の認識プロセスは、おおよそ次のように纏めることが出来よう。

- (1) 対象の存在に気づく段階：感受
- (2) 対象の詳細を吟味する段階：意欲
- (3) 対象の詳細を確定する段階：判断
- (4) 確定された知を保持する段階：保持

これらのうち (1) の感受については、佐藤 [1998]、川尻 [2010]、宇野 (智)[2011] によってその全貌が既に明らかにされてきた。しかしながら、感受された対象がどのように吟味されるのか、つまり意欲という認識過程の内容がどのようなものであるかについては、未だ詳細は不明のままである。Kalghatgi [1961: 89-92]、Shastri [1990: 271-273] などは、意欲という過程についての概説を試みてはいるものの、根拠となるテキスト提示を伴ったものではない。また、長崎 [1988]、宇野 (惇)[1996] では、ヘーマチャンドラ・スーリやデーヴァ・スーリによる論理期以降の独立作品に基づいた解説が為されており、白衣派の伝統的認識論に見られる意欲の構造が明

らかにされているとは言いがたい。

本稿は、ジナバドラをはじめとする伝統的認識論を重視する白衣派論師たちが、意欲という認識過程の構造を如何に説明するかについて明らかにすることを目的とする。特に、意欲と疑惑 (saṃśaya) の相違点について考察を加え、意欲という過程においてどのような心理的はたらきがあるのか、を明示したい。

1. 聖典における意欲

白衣派ジャイナ教聖典における、意欲という認識過程についての言及は極めて簡潔である。たとえば、『サマヴァーヤ・アング』『プラジュニャーパナー・スートラ』¹などにおいては、感受を始めとする四つの認識過程の順序のみが記され、これらの細分として眼・耳・鼻・舌・皮膚・マナスという感覚器官によるそれぞれの過程が列挙されているのみである。

これらの単なる列挙以外には、既に宇野 [2011] に訳出した通り、『ナンディー・スートラ』58.1に「素焼き壺の例」が提示され、接触感受から判断・保持に至るプロセスが説明されている。すなわち次のような記述である。

(前略) 全く同じように、何度も何度も落とされた無数のブドガラによって、[対象を] 明瞭にする手段が満たされたとき、[認識者は]「あ！」という声をあげる。しかし、[彼は] それは何の音などであるかは決して認識しない。その後、意欲 (ihā) [の段階] へ入り、その音などがこれこれのもの (音) であることを認識する。その後、判断 (avāya) [の段階] へ入り、そ [の音] は [耳の対象として] 獲得される。その後、保持 (dhāraṇā) [の段階] へ入り、可算の時間もしくは不可算の時間の間、[その知を] 保持する。
(NS 58.1)²

当該箇所においては、「あ！」という声を挙げる段階が対象感受 (arthāvagraha) であることは確実であり、この段階では聴覚感官によって捉えられている対象が何であるのかは認識されていない。引き続き意欲の過程では「その音などがこれこれのもの (音) であることを認識する」(jāṇai amuga esa saddāi) と述べられており、対象が何であるか分からなかった段階から一歩すすんで、ある程度対象が確定されている段階が意欲ということが可能であろう。しかしながら、もし意欲の段階で「これは音である」という確定的認識があるとするならば、この認識が確定知である判断 (avāya) とどのように異なるかについては判然としないままである。

『ナンディー・スートラ』では、これ以上意欲の内容について語られることはなく、意欲という段階でどのような心理的はたらきがあるかは明瞭でない。ただし、第52スートラにおいて、「意欲」という語に対する次のような同義語を列挙していることは注目に値する³。

- (1) 熟考すること (ābhogaṇayā, *ābhoganatā)
- (2) 希求すること (maggaṇayā, *mārgaṇatā)
- (3) 探究すること (gavesaṇayā, *gaveṣaṇatā)

(4) 思慮 (cintā, *cintā)

(5) 考究 (vīmaṃsā, *vīmaṃsā / *mīmāṃsā)⁴

これら五つの術語について、『ナンディー』作者は「同じ意味を持つもの」'egaṭṭhiyā'(*ekārthikā)として列挙しており、これらの相違については説明しない。また、当該箇所以外にも、『ナンディー』は古い韻文を引用し、意欲を「吟味」(viyāraṇa, *vicāraṇa)であると説明している⁵。聖典においてはこれ以上の意欲の説明は全く見られず、不明瞭な対象について、その詳細について深く考え、探究、吟味している段階としか言えないのである。

2. 認識プロセスと意欲

聖典においては詳細が解き明かされることがなかった意欲について、『バーシャ』作者であるジナバドラ・ガニ(505-609 ca.)は数多くの情報を我々に提供している。彼の著作『ヴィシェーシャヴァシユヤカ・バーシャ』における意欲の定義は次のようなものである。

以上のように、[感受によって] 普遍が把握された直後に、[そこに] 存在するもの [の特殊] についての考究 (vīmaṃsā) である意欲が [生起する]。「これは音であるのか？ それとも音ではないのか？」あるいは「[この音は] ホラ貝と角笛のうちいずれであろうか？」[というように]。⁶

既に佐藤 [1998] などが明らかにしているように、感受によって把握されるのは「普遍」(sāmaṇṇa, *sāmānya) しかも「あらゆる分別から離れた普遍=存在性 (sattā)」である。ある対象が感覚器官の場へ到来し物理的接触を持つ段階が接触感受 (vyañjanāvagraha) であり、その後に対象の存在に気づく。つまり何らかの対象が「存在する」とのみ認識する瞬間が対象感受 (arthāvagraha) という過程である。この過程に引き続き、「これは音であるのか？ それとも音ではないのか？」と対象の特殊を考究、吟味する過程が意欲とすることができよう。

ジナバドラ自身は、別の箇所において意欲を「特殊についての希求」(bhetamaggaṇa, *bhedamārgaṇa) とし、自注の中でこれを「その対象の特殊について吟味すること」(tadarthabhedavicāraṇa)、「特殊について探究すること」(viśeṣānveṣaṇa) と解釈している⁷。つまり、対象の存在性 (sattā) を最高の普遍として、この存在性の元に「音性」(śabdatva)「色かたち性」(rūpatva) などという特殊が存在し、さらに音性の元に「ホラ貝の音性」(śāṅkhatva)「角笛の音性」(śārṅgatva) などというさらなる特殊が存在するという普遍のヒエラルキーが、ここに予想されている。

さらには、ジナバドラなどの白衣派伝統的認識論を奉じる論師たちは、対象感受を「究極的な対象感受」(naiscayikārthāvagraha) と「世間的な対象感受」(vyāvahārikārthāvagraha) に二分している⁸。すなわち、究極的には最初の瞬間に対象が「ある」とのみ感受され、その後在意欲という過程を経て、「これは音である」と判断される⁹。しかしながら、さらに「ホラ貝の音か？ 角笛の音か？」という意欲が継起し、「ホラ貝の音である」というさらなる判断が下されるので、

これら第二の意欲・判断の点から見れば、最初の判断（「これは音である」）も「対象感受」と第二義的に言っているのである¹⁰。したがって、ジナバドラらの説く認識プロセスは、次のように纏められよう。

認識過程	認識に伴う表現	認識の内容
接触感受	×	対象と感覚器官の接触
対象感受（究極的）	「ある」	最高の普遍の把握
意欲1	「音か？音でないのか？」	特殊1の吟味
判断1（世間的対象感受）	「音である」	特殊1（下位の普遍）の確定
意欲2	「ホラ貝の音か？角笛の音か？」	特殊2の吟味
判断2（世間的対象感受）	「ホラ貝の音である」	特殊2（下位の普遍）の確定
↓	↓	↓

このように、伝統的認識論によれば、意欲と判断は最終的な特殊が確定されるまで繰り返されることになる。つまり、「吟味→確定→吟味→確定」という形で対象の詳細が明らかにされていく認識プロセスが設定されているのである。

3. 疑惑 (saṃśaya) との相違

以上のように、意欲は「特殊についての考究、吟味」という働きそのものと考えられ、感受に後続し判断に先行することは明らかである。しかしながら、ジナバドラの提示する「音か？音でないのか？」という認識は、単なる疑惑とどのように異なるのであろうか。ジナバドラは、このような論難を予想して、意欲が疑惑に他ならないという対論者を登場させ、これを否定する。

ある人々は、「意欲は単なる疑惑である」[と理解している]。[しかし] それは [妥当] しない。なぜなら、こ[の疑惑]は非知であるから。一方、感覚知の一区分である意欲が、どうして非知であることが妥当しようか。¹¹

意欲は感覚知の認識プロセスの一過程として組み込まれており、この過程が非知であることは当然許されない。一方で、疑惑は、知とは言えないものである。要するに、「知／非知」という点において、両者には決定的な相違があることをジナバドラは主張する。では、この「知／非知」という区別はどのようにもたらされ、疑惑と意欲の両者が峻別されるのであろうか。ジナバドラは、疑惑の特質を次のように述べている。

複数のものを [認識の] 拠り所とし、あたかも完全に眠っているかのように、[何も] 排除することがないことにより愚鈍になっている心が、疑惑そのものであり、[それは] 非知である。¹²

ここに明示されるように、疑惑は複数のものを認識の拠り所としている。つまり、「音」「色かたち」などという複数の特殊を拠り所としており、「音」という単一のものについての認識ではない。また、疑惑は、「排除」(pajjudāsa, *paryudāsa) を伴わない。複数の特殊のうち、他のものを排除

して初めて単一の特殊についての認識が確定されることは明らかであり、このような排除するはたらきを伴わないということは、対象を確定させる意志を欠いていることとなる。つまり、他の選択肢を排除することなく、全ての選択肢を同価値的に受け入れてしまい、判断に至る認識活動を完全に放棄している状態が「疑惑」と呼ばれるのである。したがって、ジナバドラが言う「音か？音ではないのか？」「ホラ貝の音か？角笛の音か？」という例示は、精確に言えば、この複数の可能性を残したままの疑惑の状態を指し示していることになる。

引き続きジナバドラは、このような疑惑と意欲の相違を次のように指摘する。

[一方、] その同じ心が、[そこに] あるものについて論証のはたらき (heūvāvara, *hetuvyāpāra)・説明づけ (根拠づけ) のはたらき (uvavattivāvara, *upapattivāpāra) に没頭し、無駄なく、実際に存在している特殊を取り、実際には存在していない特殊を捨てることに向かっている場合、[それは] 意欲である。¹³

当該箇所においてまず着目すべきは、「論証のはたらき」「説明づけ (根拠づけ) のはたらき」に心が従事している、ということであろう。疑惑の段階では、心は何のはたらきに従事することもなく、いわば受動的に全ての可能性を受け入れて積極的な活動を放棄している。一方、意欲という過程では、「論証」「説明づけ」という論理的な思考に従事していることが明らかである。このように、「心が確定に向かうはたらきに従事しているか否か」という基準により、「疑惑／意欲」つまり「知／非知」という相違が決定されているのである。

また、「実際に存在している特殊を取る」(bhūtavisesādāṇa, *bhūtaviśeṣādāna)「実際には存在していない特殊を捨てる」(abhūtavisesaccāya, *abhūtaviśeṣatyāga) という表現は、まさしく複数の特殊の選択肢について取捨選択を行うことに他ならない。「音か？音でないのか？」という選択肢のうち、音を取り、非音を捨てることによって、「音である」という確定知が得られることを意図しているのである。ただし、この取捨選択が完了してしまえば、それは判断の過程に入ることになるので、この取捨選択に「向かっている」(abhimuḥa, *abhimukha) と表現している。すなわち、疑惑の段階では何のはたらきにも従事することのなかった心が、論証などのはたらきに従事して、最終的な取捨選択 (つまり判断) へと向かう途上にある過程を「意欲」と理解することができるのである。

4. 意欲の内容：論理的思考

では、意欲という過程で行われる「論証」「説明づけ」とは、どのようなはたらきなのであろうか。ジナバドラはこの二つの語について、前者を 'sādhana'、後者を 'saṃbhava' と言い換えているが¹⁴、その内容については説明を加えない。ジナバドラの『バーシャ』に対する注釈者マラダーリ・ヘーマチャンドラ (1070-1130 ca.) は、次のように例を挙げて詳説している。

次のことが言われている。ある人が荒地の場へ行き、太陽が沈んだ時、すなわち闇がほんの少しの空間を占めた時に、遠くにある杭を見た。その後、この人には次のよ

うな反省が生じた。「これは杭であるか？人であるか？」と。しかし、こ[の反省]は疑惑であるので、知ではない。その後、この人はその杭にツタが這うのを見て、カラス (kāka)、大鷲 (kāraṇḍava)、ガチヨウ (kādamba)、アネハヅル (krauñca)、インコ (kīra) という鳥の群れが休息しているのを観察し、心の中で論証するはたらき (hetuvyāpāra) をなした。「これは杭である。ツタが這い、カラスなどが休息しているのが見られるから。」というように。同じように、saṃbhavaに基づく洞察も行った。「太陽が西の山に隠れ、そしてほんの少しの闇がこの広大な荒れ地に広がるとき、これは杭であるはずであり、人ではない。頭を搔くこと・手や首が動くことなどという、それ(人)であることを確立する理由がないから。そして、このような場所に、この時間には、たいていそれ(人)[がいること]はあり得ないからである。したがって、ここには杭が実在するものとしてあるはずであり、人はそうではない」というように。¹⁵

このヘーマチャンドラの提示する例に従うならば、「論証」というのはたらきは、肯定的な直接論証と理解して良いであろう。「ツタが這うこと」(vallyutsarpaṇa) などという杭の持つ属性を根拠として、対象が「杭である」と肯定的に論証する形が、'hetu' (= 'sādhana') という語で言い表されているのである。一方、「説明づけ」(ここではsaṃbhava) とは、「論証」とは異なり否定的な間接論証と言うことが出来る。「頭を搔くこと」(siraḥkaṇḍūyana) などという人の持つ属性が見られないことから、まずもって「人ではない」という否定的な形での論証を行う。その結果、「人ではなく、杭であるはずである」という理解へ向かうのである。

ジナバドラと同じくこのヘーマチャンドラの言明にも明示されるように、'upapatti' という語が 'saṃbhava' と言い換えられていることは注目に値する。'saṃbhava' とは、『チャラカ・サンヒター』などにおいて「伝承」(aitihya) や「想定」(arthāpatti) などと並列される知の一形態であるが¹⁶、'upapatti' という語との関連で言えば『ニヤーヤ・スートラ』における「思択」(tarka) の定義およびその注釈者たちの解釈を看過することはできない。「思択」は『ニヤーヤ・スートラ』において「その真理がまだ知られていない対象について、真理を認識するために、根拠の可能性 (kāraṇa-upapatti) という観点から熟考すること」¹⁷と定義されており、ウッディヨータカラはこの 'upapatti' という語を「可能性」「妥当性」などを意味する 'saṃbhava' という語でもって言い換えるのである¹⁸。

本稿では詳述を避けるが、このニヤーヤ学派の提唱する「思択」は、「根拠があり得ること、根拠の説明がつくこと」に基づいて、「Xか？非Xか？」という二つの選択肢に関して「非Xであるはずである」と選択的に思考することと言える。つまり、相容れない見解（「Xである」）に対して、それを否定し、「非Xであるはずである」と熟慮することがその主なはたらきと言えよう。例えばヴァーツヤーヤナは次のような例を挙げている。「アートマンは、発生するもの (utpattidharmaka : X) であるか、発生しないもの (anutpattidharmaka : 非X) であるか」という二者択一的な疑惑（意見の対立）があり、もし後者（非X）であるならば、輪廻や解脱が存在すること（すなわち根拠）の説明がつく。一方、発生するもの (X) であるならば、これら輪廻

や解脱の存在が成り立たない。この結果、発生するものであるという見解は否定され、発生しないものであることが帰結する¹⁹。このように、「思択」とは対立する二つの選択肢について、Xの否定を含めた形の非Xの論証とも言うるものなのである²⁰。

このようなニャーヤ学派の思択の解釈と比較するならば、上記のヘーマチャンドラの「説明づけ」(upapatti = sambhava) の例は、より一層「否定的論証」の性格を含み持っていることは明らかであろう。ヘーマチャンドラの言明では、「人か？人でないか？」という疑惑を前提とした上で、「人である」ことについての根拠の可能性・妥当性だけが吟味されている。もしここにある対象が「人である」ならば、「頭を搔くことが見られない」「荒地である」「太陽が隠れた闇の夜である」という様々な事実と齟齬を来たす。これら根拠となる事実を鑑みて、「人である」ための可能性、妥当性が否定されるのである²¹。このように、「説明づけ」という論理的思考段階では、「人である」という選択肢を否定すること自体に重きが置かれ、積極的に「杭である」ということを論証する形を取らないのである²²。

5. 意欲の同義語

上述のように、ジナバドラーをはじめとする白衣派聖典注釈者たちによれば、意欲という認識過程においては、「論証＝肯定的直接論証」「説明づけ＝否定的間接論証」という二つの論理的思考が確認できる。このように心が論理的思考に従事している段階が意欲という過程であり、この過程は次段階の「判断」(apāya) に引き継がれる。ジナバドラーは意欲の後に継起する「判断」の内容を次のように例示している。

(1) ここである人には、実際には存在しない対立項であるものを排除すること(vyatireka)だけに基づいて、[実際に]存在するものについての知が生じるはずである。例えば、「ここには鳥が休息していることなどは[見られ]ない。したがって、これは杭ではない。消去法により、[これは]人である」というように。(2) 同じように、ある人には、実際に存在するものの持つ特殊性が随伴すること(samanvaya)だけに基づいて、[知が生じるはずである]。[手などが]動くことなどという証相が見られるから、人である」というように。(3) さらにある人には、杭の持つ特殊性が排除されること、人の持つ特殊性が随伴すること、[という両者に基づいて知が生じるはずである]。したがって、過失はない。²³

上記の(1)は、意欲における心理的作用の「説明づけ」という否定的論証の完了を、(2)は「論証」という肯定的論証の完了を意味している。そして(3)はこれら二つの複合したものと言えよう。意欲という過程は、上記の(1)(2)(3)のような論理的思考の中途段階と言えるものであり、これらが完了して得られる確定的な知に「向かう」ものなのである。

また、この記述においては「排除」(vyatireka)・「随伴」(samanvaya) という語にも注意しなければならない。この「排除」「随伴」とは次のように纏めることができる。

- (1) 一杭の持つ特殊性 (鳥の休息) → 「一杭」 → 「+人」
- (2) +人の持つ特殊性 (動くこと) → 「+人」
- (3) 一杭の持つ特殊性 (鳥の休息) → 「一杭」
+人の持つ特殊性 (動くこと) → 「+人」

「鳥が休息していること」は杭、「[手などが] 動くこと」は人に属する特殊性であり、これらの性質が、当該の対象に随伴しているか否か、によって「杭である」「人である」という判断がもたらされる。もちろん、ここでの「排除」「随伴」という語は、二項間の遍充関係を意図しているのではなく、単なる「否定」「肯定」に近い意味合いを持つ。つまり、問題となる対象に、杭を他のものから区別する性質である「鳥の休息」、人を他のものから区別する性質である「動くこと」が認められるか否か、を問題としているのである。

ここで、上記のような心理的はたらきと『ナンディー・ストトラ』第52ストトラにおける意欲の同義語についての聖典注釈者ハリバドラ・スーリ (9C) の解釈との関連を指摘しておこう。ハリバドラは、既に紹介した意欲の五つの同義語を次のように説明している。

- (1) ābhogaṇayā : ここで対象感受の時点の直後に、実際に存在している特殊に向かつて考慮することを「熟慮」と呼ぶ。その状態が「熟慮すること」である。
- (2) maggaṇayā : [希求とは、] そ [の熟慮] の後に、その実際に存在している特殊に向かつて、随伴する属性と排除される属性を求めることである。以上が ['maggaṇa' という語の] 要点である。その状態が「希求すること」である。
- (3) gavesaṇayā : [探究とは、] そ [の希求] の後に、その実際に存在している特殊に向かつて、排除される属性を捨てて、随伴する属性を帰せしめることを通じて、考慮することである。以上が ['gavesaṇa' という語の] 本意である。その状態が「探究すること」である。
- (4) ciṃtā : 思慮とは、そ [の探究] の後、特殊な [業物質の] 減尽と抑止に基づいて、何度も何度も、自らが持つ属性が随伴する実際に存在している特殊について考えることである。
- (5) vīmaṃsā : 考究とは、[思慮の] 後に、その同じ特殊な [業物質の] 減尽と抑止に基づいて、より一層明瞭な知によって、その実際に存在している特殊に向かつて、排除される属性を捨てて、随伴する属性を考慮することである。²⁴

この言明から明らかなように、ハリバドラは『ナンディー・ストトラ』が列挙する意欲の同義語五つに何らかの差異を認め、意欲という過程の中にも細かな段階があると解釈している。簡潔に纏めれば、次のように言えよう。

- (1) 実際に存在している特殊 (対象) について考える
- (2) 随伴する属性と排除される属性を求める
- (3) 排除される属性を捨て、随伴する属性を帰せしめて、対象について考える
- (4) 繰り返し、随伴する属性が帰属している対象について考える

(5) より明瞭な形で、排除される属性を捨て、随伴する属性について考える

すなわち、ここにある対象の確定知に向かって、「鳥が休息していること」「[手などが] 動くこと」などという諸々の属性を求め、それらの属性が対象に見られるのか否かを取捨選択し、この属性の取捨選択がより明瞭になっていく過程こそがこれらの細分に当たると言ってよいであろう。

なお、『ナンディー・スートラ』第60スートラ第77詩節では、「感覚知」(ābhiñibohiya = matiñāpa) の同義語を列挙する際に、上記と同じような意欲の同義語をも提示している。すなわち、次のような語群である。

- (1) 意欲 (ihā) (2) 他のものの排除 (apoha) (3) 考究 (vīmaṃsā) (4) 希求 (maggaṇā)
(5) 探究 (gavesaṇā) (6) 統合知 (saṇṇā, *saṃjñā) (7) 想起 (satī, *smṛti) (8)
思考 (matī) (9) 知恵 (paṇṇā)、[これら] 全ては感覚知 (ābhiñibohiya) である。²⁵

当該の韻文は『アーヴァシュヤカ・ニルユクティ』第12詩節と完全一致しており、ジナバドラーはこの語群について、(2) を「判断」(avāya)、(7) を「保持」(dhiti, *dhr̥ti = dhāraṇā)、(8)(9) を「感覚知」全般、それ以外の (1)(3)(4)(5)(6) を「意欲」の同義語に担当している²⁶。これらの意欲の同義語についてのハリバドラーの解釈を纏めると、以下の通りである。

- (1) ihā: 実際に存在しているものについて考慮するはたらき (sadarthaparyālocanaceṣṭā)、
随伴しているもの、排除されているものについての考慮 (anvayināṃ vyatirekināṃ
ca paryālocanā)
(3) vīmaṃsā: 意欲と判断の間にある知 (ihāpāyamadhyavarttī pratyayaḥ)、意欲の後の
「およそ [ここには] 頭を搔くなどという人の属性が妥当する」という知 (ihāyuttaraḥ
prāyaḥ śiraḥkaṇḍūyanādayaḥ puruṣadharmā ghaṭante iti saṃpratyayo vimarśaḥ)
(4) maggaṇā: 随伴する属性を求めること (anvayadharmānveṣaṇā)
(5) gavesaṇā: 排除される属性についての考慮 (vyatirekadharmālocanā)
(6) saṇṇā: 感受の後に生じる感覚知の一種 (avagrahottarakālabhāvī mativīṣeṣa) ²⁷

ここに示される解釈は、前述の第52スートラでの解釈と若干の相違が認められるが、意欲という認識過程における具体的なはたらきについては概ね合致していると言ってよい。(1) および(6)は、意欲という過程を全体的に示すものである。また、(4)「希求」(maggaṇā) と(5)「探究」(gavesaṇā) は、anvayadharmā と vyatirekadharma に関わるものであり、前者が属性を「求めること」(anveṣana)、後者が属性を「考慮すること」(ālocana) を主たるはたらきとしている点は一致している²⁸。また、(3)「考究」(vīmaṃsā) は、判断の直前に位置すると考えられ、ほぼ意欲における論理的思考が完了しつつある時点の知と理解することができる。

先ほどのジナバドラーの言明にあてはめるならば、「鳥が休息していること」は排除される属性 (vyatirekadharma) にあたり、「[手などが] 動くこと」は随伴する属性 (anvayadharmā) にあたる。目の前にある対象に関して、前者の属性が否定され、後者の属性が認められて「人である」という判断に至る。すなわち、意欲という段階で行われる論理的思考の内容は、「Xか? Yか?」とい

う疑惑を前提として、「Xの持つ属性」「Yの持つ属性」を求め、これらを取捨選択しつつ、「XもしくはYであるはずである」と選択的に考慮していくことに他ならないのである。

以上、意欲の同義語からその内容を考察してきたが、これらに見られる「諸属性の考慮」という概念は、ジナバドラが言う「論証」「説明づけ」という論理的思考を形成するものと言える。前者（肯定的論証）ではanvayadharmāが論拠となり、後者（否定的論証）ではvyatirekadharmaが論拠となっている。もちろん、これらの属性が属性保持者たる杭や人とどのような論理的関係にあるか、という考察はジナバドラの言明からは窺うことは出来ず、その論理的整合性については判然としない²⁹。しかしながら、意欲という認識過程においては、anvayadharmāを論拠とする肯定的論証、vyatirekadharmaを論拠とする否定的論証を明確に看取することができ、これらの論証の完了によって「判断」という過程に移る認識プロセスは、ジナバドラなどの聖典注釈者たちの伝統に帰すことが出来るのである。

5. まとめ

以上の考察により次のことが明らかとなった。

- ・意欲という過程は、感受によって把握された「最高の普遍」から最終的な特殊が明らかにされるまで、「意欲→判断→意欲→判断」という形で繰り返される。
- ・疑惑と意欲は、心が何らかのはたらき（論理的思考）に従事しているか否か、によって区別される。
- ・意欲という過程における心理的はたらきは、「論証」(肯定的な直接論証)・「説明づけ（根拠づけ）」(否定的な間接論証)の二つ、および両者の複合した形である。
- ・このような論理的思考の内容は、随伴する属性 (anvayadharmā) と排除される属性 (vyatirekadharma) を求めて、これらを考慮するという知的はたらきによって構成される。

【略号および参考文献】

ĀN: *Āvaśyakaniryukti* (Bhadrabāhu): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad-Āvaśyakasūtram*. 4Vols., Āgamodaya Samiti Series nos. 1-4, Mehesana, 1916-17.

ĀNHV: *Āvaśyakaniryuktivṛtti* (Haribhadra Sūri): See ĀN.

BhS: *Bhagavatīsūtra*: Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad Bhagavatīsūtram*. 3Vols., Āgamodaya Samiti Series nos.12, 13, 14, Mehesana, 1918-21.

BhSV: *Bhagavatīsūtravṛtti* (Abhayadeva Sūri): See BhS.

Hattori, Masaaki (服部正明)

1969 「論証学入門 ニャーヤ・バーシュヤ第一篇」、『世界の名著1 バラモン教典 原

- 始仏典』, 東京: 中央公論社, pp.331-397.
- JDhKV: *Jñātadharmakathāvṛtti* (Abhayadeva Sūri): *Śrīmat Jñātadharmakathāṅgam*. Āgamodaya Samiti Series No.25, Mehesana, 1919.
- Kalghatgi, T. G.
1961 *Some Problems in Jaina Psychology*. Karnatak University Research Series #2, Dharwar: Karnatak University.
- Kano, Kyo (狩野恭)
1997a 「ウツデオータカラのtarka解釈—Nyāyavārttika 1.1.40研究—」, 『教育諸学研究論文集』(神戸女子大学教育学科研究会) 第11巻, pp.63-76.
1997b 「Nyāyāvātāra研究—anyathānuṣaṅgītiとūha—」, 『ジャイナ教研究』 第2号, pp.25-49.
- Kawajiri, Yohei (川尻洋平)
2010 「ヤシオーヴィジャヤのvyañjanāvagraha解釈とその源泉」, 『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』 第21号, pp.95-113.
- Nagasaki, Hojun (長崎法潤)
1988 『ジャイナ認識論の研究』, 京都: 平楽寺書店.
- NS: *Nandīsūtra* (Devavācaka): Muni Puṇyavijaya, Dalsukh Malvania, Amṛtlāl Mohanlāl Bhojak (eds.), *Nandīsuttam and Aṇuogaddārāṃ*. Jaina Āgama Series no.1, Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1968.
- NSHV: *Nandīsūtravṛtti* (Haribhadra Sūri): Muni Puṇyavijaya (ed.), *Nandīsūtram by Śrī Devavācaka with the Vṛtti by Śrī Haribhadracārya and Durgapadavyākhyā on Vṛtti by Śrīcandrācārya and Viśamaṣaṅkara on Vṛtti*. Prakrit Text Society Series No.10, Varanasi-Ahmedabad: Prakrit Text Society, 1966.
- NyBh: *Nyāyabhāṣya* (Vātsyāyana): Tāranātha Nyāyatarkatarkatīrtha and Amarendramohan Tarkatīrtha (eds.), *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyāṭikā & Viśvanātha's Vṛtti*. Calcutta Sanskrit Series nos. 18, 19, Calcutta, 1936-44. (Reprint, Kyoto: Rinsen Book Co., 1982.)
- NyS: *Nyāyasūtra*: See NyBh.
- NyV: *Nyāyavārttika* (Uddyotakara): See NyBh.
- PS: *Prajñāpanāsūtra*: Muni Puṇyavijaya, Dalsukh Malvania, Amṛtlāl Mohanlāl Bhojak (eds.), *Pañṇavaṇāsuttam*. Jaina Āgama Series no.9 (Part 1), Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1969.
- Sato, Koju (佐藤宏宗)
1998 「感官知に位置づけられる感覚 (avagraha) の対象」, 『ジャイナ教研究』 第4号, pp.67-109.

SA: *Samavāyāṅgasūtra*: Muni Jambūvijaya (ed.), *Samavāyāṅgasūtram with the Commentary by Ācārya Śrī Abhayadevasūri Mahārāja*. Jaina Āgama Series No.20, Mumbai: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 2005.

Shastri, Indracandra

1990 *Jaina Epistemogy*. Varanasi: P. V. Research Institute.

TAS: *Tattvārthasūtra* (Umāsvāti): Hiralal Rasikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthād-higamasūtra, Part I*. Devacandra Lālbhai Jainapustakodhdhāra Fund Series no.67, Bombay, 1926.

TASṬ (H) : *Tattvārthasūtraṭīkā* (Haribhadra Sūri): *Śrī Tattvārthasūtram*. With Auto-Commentary, Haribhadra's Ṭīkā, Ratlam: Ṛṣabhadevji Keśarīmalji Jaina Śvetāmbara Saṃsthā, 1936.

TASṬ (S) : *Tattvārthasūtraṭīkā* (Siddhasena Gaṇi): See TAS.

Ui, Hakuju (宇井伯寿)

1925 『印度哲学研究 第二』, 東京: 甲子社書房.

Uno, Atsushi (宇野惇)

1996 「『プラマーナ・ナヤ・タットヴァーローカ』 —和訳と解説— (2)」, 『ジャイナ教研究』 第2号, pp.1-15.

Uno, Tomoyuki (宇野智行)

2011 「白衣派ジャイナ教における到達作用説」, 『ジャイナ教研究』 第17号, pp.19-43.

VĀBh: *Vīśeṣāvaśyakabhāṣya* (Jinabhadra Gaṇi): Dalsukh Malvania (ed.), *Ācārya Jinabhadra's Vīśeṣāvaśyakabhāṣya with Auto-commentary*. 3Vols., L. D. Series, nos. 10, 14, 21, Ahmedabad, 1966-68.

VĀBhBV: *Vīśeṣāvaśyakabhāṣyabrhadvṛtti* (Maladhāri Hemacandra): *Śrījinabhadragāṇ-ikṣamāśramaṇapādaviracitam Vīśeṣāvaśyakabhāṣyam / Maladhāriśrīhemacandrasūriviracitayā śiṣyahitānāmnyā Bṛhadvṛtṭyā vibhūṣitam*. Śrī Yaśovijaya Jaina Granthamālā, nos. 25, 27, 28, 31, 33, 35, 37, 39, Benares, 1911-15. (Reprint. Bhuvanabhānu Sūri, ed. *Vīśeṣāvaśyakabhāṣya*. 2Vols. Reprint. Mumbai: Divya Darśan Trust, 1982.)

VĀBhKV: *Vīśeṣāvaśyakabhāṣyavṛtti* (Koṭyācārya): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Siddhāntapāt-hodhipuṣṭatamāntaḥkaraṇa Śrī-Jinabhadragāṇikṣamāśramaṇadṛbham Śrī-Koṭyācāryakṛtaprācīnatama-Vivaraṇavṛtam Śrī Vīśeṣāvaśyakasūtram*. 2Vols., Ratlam: Ṛṣabhadevji Keśarīmalji Śvetāmbara Saṃsthā, 1936-37.

VĀBhSV: *Vīśeṣāvaśyakabhāṣyavopajñavṛtti* (Jinabhadra Gaṇi): See VĀBh.

Yamakami, Shodo (山上證道)

1979 「Nyāya学派における tarka の語義」, 『印度学仏教学研究』 28-2, pp. (77)-(80).

*本稿は、平成23年度科学研究費補助金・基盤研究（C）による研究成果の一部である。連携研究者である佐藤宏宗博士（東方研究会・研究員）、研究協力者である藤永伸博士（都城高専・教授）、河崎豊博士（大谷大学・助教）、小林久泰博士（筑紫女学園大学・人間文化研究所・リサーチアソシエイト）からは、数々の助言を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

¹ Cf. BhS 8.2.Sū 318 (f.342b-343a): ābhiṇibohiyānāṇe cauvvihe pannatte, taṃjahā uggaho ihā avāodhāraṇā, evaṃ jahā rāyappaseṇaie ṇāṇāṇaṃ bhedo taheva ihavi bhāṇiyavvo jāva settaṃ kevalanāṇe //; SA 28 (p.94): ābhinibohiyaṇāṇe aṭṭhāvīsativihe paṇṇatte, taṃ jahā --- sotimḍiyatthoggahe, cakkhimḍiyatthoggahe, ---, sotimḍiyaiḥā, jāva phāsimḍiyaiḥā, ṇoimḍiyaiḥā, --- /; PS 15.2.Sū 1016: katividhā ṇaṃ bhaṃte ihā paṇṇattā, goyamā paṃcaviḥā ihā paṇṇattā / taṃ jahā --- soimḍiyaiḥā jāva phāsimḍiyaiḥā /.

² See NS 58.1: evāṃ eva pakkipamāṇehiṃ pakkipamāṇehiṃ aṇaṃtehiṃ poggalehiṃ jāhe taṃ vaṃjaṇaṃ pūritaṃ hoi tāhe 'huṃ' ti karei ṇo ceva ṇaṃ jāṇai ke vesa saddāi, tao ihaṃ pavisai tao jāṇai amuga esa saddāi, tao avāyaṃ pavisai tao se uvagayaṃ havai, tao ṇaṃ dhāraṇaṃ pavisai tao ṇaṃ dhārei saṃkhejjaṃ vā kālaṃ asaṃkhejjaṃ vā kālaṃ /.

³ See NS 52.2: tise ṇaṃ ime egaṭṭhiyā ṇāṇāghosā ṇāṇāvamaṇjaṇā paṃca ṇāmadheyā bhavaṃti, taṃ jahā --- ābhogaṇayā maggaṇayā gavesaṇayā cimtā vīmaṃsā / se taṃ ihā /.

⁴ 'vīmaṃsā' という語について、ハリバドラは当該箇所『ナンディー註』において 'vīmaṃsā' と注釈し、ジナバドラは自著『ヴィシエーシャーヴァシユヤカバーシャ』自注において 'mīmāṃsā' と説明している。

⁵ Cf. NS 60, v.73: atthāṇaṃ uggahaṇaṃ tu uggahaṃ taha viyālaṇaṃ ihaṃ / vavasāyaṃ tu avāyaṃ dharaṇaṃ puṇa dhāraṇaṃ biṃti //。（「諸々の対象について把握することを「感受」、同様に「諸々の対象について」吟味すること（vīyāraṇa, *vicāraṇa）を「意欲」、一方、「諸々の対象について」確定することを「判断」、さらに「諸々の対象について」保持することを「保持」と言う。）当該の韻文は、『アーヴァシユヤカ・ニルユクティ』第3詩節とパラレルである。『ナンディー』作者はニルユクティ作者であるバドラバーフに先行すると考えられるが、彼ら両者がより古い伝承を共に引用している可能性がある。宇野（智）[2011: 37, note 6]を参照せよ。

⁶ See VĀBh 288: iya sāmaṇṇagahaṇāṇaṃtaram ihā sadatthavīmaṃsā / kim itaṃ saddo 'saddo ko hojja va saṃkhasaṃgāṇaṃ //.

⁷ Cf. VĀBh 179ab: sāmaṇṇatthāvaggahaṇaṃ oggaho bhetaṃmaggaṇaṃ ahehā /; VĀBhSV on 177-179: tadarthabhedavicāraṇaṃ ihā viśeṣaṇveṣaṇaṃ ity arthaḥ /.

⁸ 白衣派論師たちのこの対象感受の二区分については、佐藤 [1998: 83-84] を参照されたい。この対象感受の二区分は、ジナバドラによって初めて提唱され、後の白衣派聖典注釈者たちやヤ

ショーヴィジャヤに継承されたと考えられる。

⁹ このように、対象感受において最高の普遍である「存在性」が把握され、意欲以下の過程においてその詳細が明らかになってゆくプロセスは、白衣派の伝統的認識論に特徴的な点と言える。空衣派論師や論理期の独立作品の作者たちは、「存在性」を把握する過程を「見」(darśana)とし、感受の過程において「これはXである」という確定知が得られると考えている。長崎[1988: 253-255]、宇野(惇)[1996: 5]、佐藤[1998: 80ff.]を参照されたい。

¹⁰ 前注の佐藤論文にはヤショーヴィジャヤの『タルカ・バーシャー』における、感受と意欲の対象の相違が訳出されているので、参照されたい。なお、ジナバドラ自身の感受から判断に至る過程の説明は、次のようなものである。Cf. VĀBh 281-283: sāmaññamettaḡahañam ñecchayiyo samayam oggaho paḡhamo / tatto 'ñamṡaram ihiyavattuvisesassa jo 'vāyo // so puṡa ihāvāyāvekkhāto 'vaggaho tti uvayarito / essavisesāvekkham sāmaññam geṡhate jeṡa // tatto 'ñamṡaram ihā tatto 'vāyo ya tavvisesassa / iya sāmaññavisesāvekkhā jāvaṡtimo bhedo //。(「普遍のみについての把握が、究極的な[対象]感受であり、[これは]最初のサマヤ(瞬間)に[生じるものである]。その後、意欲の対象となった事物の特殊について、判断(avāya)が[生じる]。ところが、そ[の判断]は、[さらに後続する]意欲や判断の点から見て「感受」と比喩的に表現される。というのも、後々の特殊の点から見れば、普遍が把握されているからである。その後[さらに]意欲が[生じ]、その後、そ[の意欲によって吟味された]特殊についての判断が[生じる]。以上のように、最終的な特殊に至るまで、下位の普遍(sāmaññavisesa)の考慮[が為されるべきである]。)

¹¹ See VĀBh 181: ihā saṡsayamettaṡ keyiṡ ña tayaṡ tao jam aṡṡāñam / maṡiṡāñamso cehā kadham aṡṡāñam tāi juttaṡ //.

¹² See VĀBh 182: jam aṡegatthālamṡbaṡam apajjudāsaparikumṡhitaṡ cittaṡ / sayati va savvappayato taṡ saṡsayarūvam aṡṡāñam //.

¹³ See VĀBh 183: taṡ cia sadatthahetūvavattivāvatapparam amohaṡ / bhūtābhūtavisesādāñaccāyābhimuham ihā //.

¹⁴ Cf. VĀBhSV on VĀBh 183: hetūpapattivāpāraparam --- hetuṡ sādhanam, upapattiṡ saṡbhavaṡ, tadanveṡaṡavyāpāraparam ity arthaṡ /.

¹⁵ See VĀBhBV on VĀBh 183-4: idam uktaṡ bhavati --- kenacid araṡyadeṡaṡ gatena savitur astamayasaṡaye iṡadavakāśam āsādayati tamisre dūravartī sthāṡur upalabdhaṡ, tato 'sya vimarśaṡ samutpannaṡ --- kim ayaṡ sthāṡuṡ puruṡo vā iti / ayaṡ ca saṡsayatvād ajñānam / tato 'nena tasmin sthāṡau dṡṡṡvā vallyārohaṡam, pravilokya kāka-kāraṡṡava-kādamba-krauñca-kīra-śakunta-kula-nilayanam, kṡṡas cetasi hetuvyāpāraṡ, yathā sthāṡur ayam, vallyutsarpaṡakākādinilayanopalambhāt / tathā saṡbhavaparyālocanaṡ ca vyadhāyi, tad yathā --- astācalāntarite savitari, prasarati ceṡattamisro mahāraṡye 'smin sthāṡur ayaṡ saṡbhāvāyate, na puruṡaṡ, śiraṡkaṡṡūyanakaragrivācalanādes tadvyavasthāpakahetor

abhāvāt, idr̥ṣe ca pradese 'syāṃ velāyāṃ prāyas tasyāsaṃbhavāt / tasmāt sthāṇunātra
sadbhūtena bhāvyaṃ, na puruṣeṇa /.

¹⁶ 宇井 [1925: 459-460] によれば、'saṃbhava'(宇井氏は「随生」と訳す)とは、不可離の関係にある二者のうちあるXの認識によってYを知ること、集合の認識によってその集合に含まれるものを知ることである。ジャイナ教においても、ハリバドラやシッダセーナ・ガニが、より重い重量（1 プラスタ = 4 クダヴァ）がある場合に、それに含まれるより小さい重量（1 クダヴァ）が存在することを知ら、という例を挙げている（Cf. TASṬ (H) on TAS 1.12 (f.61): saṃbhavaḥ prasthādaḥ kuḍavādibhavaḥ /; TAST (S) on TAS 1.12 (p.74): saṃbhavo 'pi pramaṇaṃ --- prasthe kuḍavaḥ samasti, asmin prasthākhye ādhāre kuḍava ādheyaḥ saṃbhavatīti eṣasaṃbhavaḥ /).

¹⁷ See NyS 1.1.40: avijñātataṭṭve 'rthe kāraṇopapattitas tattvajñānārtham ūhas tarkaḥ //. Cf. 服部 [1969: 379] .

¹⁸ See NyV on 1.1.40 (p.326): kāraṇopapattitaḥ pramaṇopapattitaḥ / upapattiḥ saṃbhavaḥ /. ウツディョータカラのタルカ解釈については、狩野 [1997a] を参照されたい。

¹⁹ Cf. NyBh on NyS 1.1.40 (pp.321-322): tatra nidarśanam --- yo 'yaṃ jñātā jñātavyam arthaṃ jānīte taṃ tattvato jānīyeti jijñāsā / sa kim utpattidharmakaḥ athānutpattidharmaka itī vimarśaḥ / vimṛśyamāne 'vijñātataṭṭve 'rthe yasya dharmasyābhyānujñākāraṇam upapadyate tam anujānāti / yady ayam anutpattidharmakaḥ, tataḥ svakṛtasya karmaṇaḥ phalam anubhavati jñātā, duḥkhajanmapravṛttidoṣamithyājñānānām uttaram uttaraṃ pūrvasya pūrvasya kāraṇam, uttarottarāpāye tadanantarāpāyād apavarga itī syātāṃ saṃsārāpavargau / utpattidharmake jñātari punar na syātām / utpannaḥ khalu jñātā dehendriyabuddhivedanābhiḥ saṃbadhyata itī nāsyedaṃ svakṛtasya karmaṇaḥ phalam utpannaś ca bhūtvā na bhavatīti tasyāvidyamānasya niruddhasya vā svakṛtakarmaṇaḥ phalopabhogo nāsti / tad evam ekasyānekaśārīrayogaḥ śārīraviyogaś cātyantaṃ na syād itī yatra kāraṇam anupapadyamānaṃ paśyati tan nānujānāti / so 'yam evaṃlakṣaṇa ūhas tarka itī ucyate /. 服部 [1969: 380] を参照されたい。

²⁰ 山上 [1979] によれば、思釈 (tarka) に誤った見解の否定により正しい見解を導出するという「帰謬論証」(prasaṅgasādhana) の性格を明確に見出したのはヴァーチャスパティミシユラであるという。すなわち、ヴァーツヤヤーナおよびウツディョータカラは共に、「Xである」「非Xである」という二つの選択肢について、その各々について理由が成り立つか否かを熟慮する形を取っており、「妥当と思える見解」を暗示するという点に注意が向けられている。彼らの解釈では、「誤った見解を否定する」という側面は強調されておらず、帰謬という意味が明確に示されるのはヴァーチャスパティを待たなければならないのである（山上 [1979: 78]）。

²¹ ジナバドラの当該韻文 (VĀBh 183) に対する注釈者たちは、次のような韻文を引用して、意欲の内容を例示している。See VĀBhKV on 184; VĀBhBV on 183-4: araṇyam etat

savitāstamāgato na cādhunā saṃbhavatiha mānavaḥ / prāyas tad etena khagādibhājā bhāvyaṃ smarārāṭisamānanāmnā (VĀBhKV: ratipriyatamārināmnā) // (「ここは荒地(未開の地)である。太陽は既に沈んでいる。そして今はここに人がいることはあり得ない。それ故おそらく、これは鳥などが居るシヴァと同じ名称を持つ[木もしくは柱]であるはずである。)」この韻文がどのような文献を引用元としているかについては判然としないので、文脈上から推測することは難しいが、「人か、人でないか」という選択肢を前提とした上で、「人である」可能性が否定されていることは確かである。

²² このような「否定的論証」という要素を鑑みるならば、「説明づけ」という論理的思考は、『シャシュティ・タントラ』『ユクティ・ディーピカー』などのサーンキヤ学派の文献類やウッディヨータカラの『ニヤーヤ・ヴァールティカ』に見られる ‘avīta / āvīta’ と呼ばれる「否定的論証」との近接性が指摘できるであろう。これらの文献に見られる ‘avīta / āvīta’ とジャイナ教の『ニヤーヤ・アヴァターラ』に見られる推理論との比較については、狩野 [1997b] を参照されたい。

²³ See VĀBhSV on VĀBh 185: iha kasyacid asadbhūtasya pratiyogino ‘rthasya vyatirekamātrād eva bhūte ‘rthasampratyayo bhavet / tad yathā ---- nātra vāyonilayanādayaḥ, tasmān nāyaṃ sthāṇuḥ, pāriśeṣyāt puruṣa iti / tathā kasyacid sadbhūtārthaviśeṣasamanvayamātrād eva syāc calanādiliṅgopalambhāt puruṣa iti / kasyacic ca sthāṇuviśeṣavyatirekāt puruṣaviśeṣasamanvayāc ceti na doṣaḥ // 当該箇所に見られる「消去法により」(pāriśeṣyāt) という語の使用によっても、意欲という段階の心理的はたらきに、「否定的論証」という性格が窺える。すなわち、二つの選択肢のうちのXを否定して、非Xを間接的に論証しようという形である。

²⁴ See NSHV on NS 52 (pp.52-53): ‘ābhoganatā’ ihārthāvagrahasamayāsamanantaram eva sadbhūtārthaviśeṣābhimukham ālocanam ābhoganam ucyate, tadbhāva ābhoganatā / ---- / sadbhūtārthaviśeṣābhimukham eva tadūrdhvam anvayavyatirekadharmānveṣaṇam iti hṛdayam, tadbhāvo mārṅaṇatā / ---- / tata ūrdhvaṃ sadbhūtārthaviśeṣābhimukham eva vyatirekadharmaparityāgato ‘nvayadharmādhyāsenālocanam iti garbhaḥ, tadbhāvo gaveṣaṇatā / tato muhur muhuḥ kṣayopāsamaviśeṣataḥ svadharmānugatasadbhūtārthaviśeṣacintanam cintā / ---- / kṣayopāsamaviśeṣād evordhvaṃ spaṣṭatarāvabodhataḥ sadbhūtārthaviśeṣābhimukham eva vyatirekadharmaparityāgato ‘nvayadharmālocanam vimarṣaḥ /

²⁵ See NS 60, v.77 (= ĀN 12): ihā apoha vimarṣā maggaṇā ya gaveṣaṇā / saṅṅā satī matī paṅṅā savvaṃ ābhiṇibohiyaṃ //

²⁶ Cf. VĀBh 395: hoi apoho ‘vāyo satī dhiti savvam eva matipaṅṅā / ihā sesā savvaṃ idaṃ ābhiṇibodhiyaṃ jāṇa //; VĀBhSV on VĀBh 394-5: apohagrahaṇād avāyaḥ, smṛtir dhāraṇā, matiḥ prajñeti ca sarvam eva, śeṣābhidhānānīhā / sarvam evedam ābhinibodhikam, arthavacanaparyāyaviśeṣāt /

²⁷ これらのハリバドラの解釈は、以下の『ナンディー』注および『アーヴァシユヤカ・ニルユ

クティ』注から纏めた。Cf. NSHV on NS 60, v.77: *ihanam ihā, sadarthaparyālocanaceṣṭety arthaḥ / apohanam apohaḥ, niścaya ity arthaḥ / vimarśaṇam vimarśaḥ, ihāpāyamadhyavartti pratyayaḥ / tathānvayadharmānveṣaṇā mārgaṇā / caḥ samuccayārthaḥ / vyatirekadharmālocanā gaveṣaṇā / tathā samjñānaṁ samjñā, vyañjanāvagrahottarakālabhāvi mativiṣeṣa ity arthaḥ /; ĀNHV on 12: vyākhyā --- iha ceṣṭāyām ihanam ihā satām arthānām anvayinām vyatirekiṇām ca paryālocanā iti yāvat, apohanam apohaḥ niścaya ity arthaḥ, vimarśanam vimarśaḥ ihāyā uttaraḥ, prāyaḥ śiraḥkaṇḍūyanādayaḥ puruṣadharmā ghaṭante iti sampratyayo vimarśaḥ, tathā anvayadharmānveṣaṇā mārgaṇā, caśabdaḥ samuccayārthaḥ, vyatirekadharmālocanā gaveṣaṇā, tathā samjñānaṁ samjñā, vyañjanāvagrahottarakālabhāvīm-ativīṣeṣa ity arthaḥ /.*

²⁸ 感覚知の認識プロセスを説く文脈とは全く異なる箇所であるが、次のアバヤデーヴァの言明(『ジュニヤータダルマカター』注)は「希求」「探究」などの語を説明するものとして興味深い。ハリバドラの解釈とは若干異なるが、「希求」「探究」という概念が *anvayadharmā / vyatirekadharma* と関わるものとされていることは注目すべきであろう。Cf. JDhKV on 7 (f.12a): *tathā ihā ca --- sthāṇur ayam puruṣo vety evaṁ tadarthālocanābhimukhā maticeṣṭā, apohaś ca --- sthāṇur evāyam ityādirūpo niścayaḥ, mārgaṇam ca --- iha vallyutsarppaṇādayaḥ sthāṇudharmā eva prāyo ghaṭante ityādyanvayadharmālocanarūpaṁ, gaveṣaṇam ca --- iha śārīrakaṇḍūyanādayaḥ puruṣadharmāḥ prāyo na ghaṭanta iti vyatirekadharmālocanarūpaṁ -- /.* (そして、同様に「意欲」とは「これは杭であろうか、それとも人であろうか」というように、その対象について考慮することに向かう知的はたらきである。そして「他者の排除」(*apoha*)とは、「これは杭に他ならない」という形の確定知である。そして「希求」とは、「ここには、およそツタが這い上がることなどという杭の諸属性だけが妥当する」などというように、随伴する属性について考慮する形[の知]である。そして「探究」とは、「ここには、およそ身体を搔くことなどという人間の諸属性は妥当しない」というように、排除される属性について考慮する形[の知]である。)なお、アヴァヤデーヴァは、『バガヴァティー』注において、次のような簡潔な説明も行っている。Cf. BhSV on BhS 9.31.Sū 366 (f.433b) : *'ihāpohamaggaṇagaveṣaṇam karemaṇassa' tti ihehā --- sadarthābhimukhā jñānaceṣṭā, apohaś tu --- vipakṣanirāsaḥ, mārgaṇam ca --- anvayadharmālocanam, gaveṣaṇam tu --- vyatirekadharmālocanam iti /.*

²⁹ ジナバドラをはじめとする白衣派聖典注釈者の伝統における意欲に関連する論理とその整合性については、さらに詳細な考察が必要である。ジャイナ教が間接知として認める「思択」(*tarka*)、ニャーヤ学派が提唱する「思択」、サーンキヤ学派などが提示する '*vīta / avīta, āvīta*' との比較をも含め、今後の課題としたい。

(うの ともゆき：日本語・日本文学科 准教授)